

第1406回(10月25日)

野菜市場の成熟化と市場集中

田 村 馨

本報告では、今日の食品市場をみていくうえで無視できない「成熟化」をキーワードに、昭和50年代の野菜流通構造の変化について検討を加えた。周知の通り、食料品市場は昭和50年代に入り大きく変化した。その変化をひとことでいえば、成熟化というタームが当てられる。今日の食料品供給システムを点検するにあたっては情報化、国際化の影響と併せて、既に企業戦略なり市場構造に浸透している成熟化の影響についてもふまえておく必要がある。

報告の骨子は以下の通りである。

(1) 市場の成熟化を製品ライフサイクル曲線に即して定義し、さらに市場成熟化の背景にあったとみられる野菜消費の変化を家計調査データ等によって確認したうえで、主要な品目18品目についてその市場成熟度を測定した。その結果、野菜市場は総体として昭和50年代に成熟期に突入したことが明らかになった。18品目のうちでそのライフサイクルが未だ成熟期のカーブを描いていないのは、かぼちゃとほうれんそうのみであった。

(2) 野菜市場の成熟化が産地集中に対しどのような影響を及ぼすかについて統計データによって検討を加えた。産地集中を表す指標としては、当研究所小林弘明研究員によって算出された出荷量に関するジニ係数を用いた。昭和47年から57年にかけての産地集中化の推移を、先に計測した市場成熟度で説明する回帰分析等の検討を加えた結果、市場の成熟化が産地集中に対してプラスの働きをもつことが統計的に検証された。

(3) 市場の成熟化ならびに産地の集中化は野菜流通構造の効率性からみてどのようなものと評定されるかについて検討を加えた。その際、小売価格の店舗間分散が流通構造の競争性をあらわす指標であるとの分析枠組みに依拠した。そして、市場の成熟化ならびにそれに伴う産地集中化は店舗間価格分散に対してマイナスの働きをもつことから、流通構造にとって競争促進要因であることが確認された。

(4) ただし、実際の店舗間価格分散の推移は昭和46年から57年にかけてほとんどの品目で増大傾向を示す。このことは、小売価格の店舗間分散を規定する他の要因の関与を示唆する。小売市場構造要因の影響について点検を加えた結果、消費者購買行動の変化(最寄り店志向を強める傾向)が店舗間価格分散を大きくした要因として摘出された。この結果は、流通構造を規定する要因として消費者ならびに小売業者の行動が今日においては無視できないことを含意している。

(5) 報告を通じてあらためて認識されたことは、今日の食料品流通をめぐる新しい動きを効率性だけではなく有効性の観点からも評価することの必要性である。この点については、小売業の競争がもつダイナミックさに注目し、その競争の動態過程のなかに流通の効率性・有効性を向上させるメカニズムを探ることが有効な分析視角となろう。

表 2 二次傾向線による卸売市場の成熟度の推計

	a	b	自由度 修正済 決定係数	T
だいこん	+ (***)	(***)	0.9644	59.9
かぶ		"	0.7976	53.8
にんじん		"	0.9070	56.4
ごぼう		(**)	0.8429	58.6
はくさい		(***)	0.7766	48.6
キャベツ		"	0.8490	53.6
ほうれんそう		"	0.9812	75.2
ねぎ		(**)	0.8843	62.1
レタス		(***)	0.9891	61.1
きゅうり		- "	0.8516	51.3
かぼちゃ		"	0.9683	∞
なす		(**)	0.9205	53.6
トマト		(***)	0.8158	52.8
ピーマン		"	0.9628	52.3
ばれいしょ		"	0.8928	55.7
さといも		"	0.6191	52.2
やまのいも		"	0.7763	56.0
たまねぎ		"	0.7199	53.3
野菜計		"	0.9841	55.9

注(1) 卸売価格(3カ年移動平均値)の42~60年の推移を2次式、 $at+bt^2+c$ で推計した結果を示す。

ただし、 $t=42\cdots60$ 。

(2) Tは推計された2次式が最大値をとる時点(昭和)をあらわす。

(3) ***は1%水準、**は5%水準で係数が統計的に有意であることを示す。

資料：『青果物卸売市場調査報告』。